

「今後の選手強化のあるべき姿について」の意見交換会 会議録

(公財)日本セーリング連盟オリンピック特別委員会、ジュニア・ユース育成強化委員会

日時：2012年11月10日(土) 13:00～18:30

会場：味の素ナショナルトレーニングセンター（東京都北区西が丘）

出席者：47名（別紙：「意見交換会出席者名簿」）

1. 「意見交換会」開催の目的・主旨（西岡一正オリンピック特別委員会 委員長）

- ・ オリンピックで活躍する選手を育成することでセーリングの普及につながる
- ・ オリンピックは進化している；他スポーツ同様アスリート化が進んでいて、選手層も若返っている；勝つための様々な工夫がなされている
- ・ 日本の選手育成は今まで企業に依存
 - 企業・個人レベルではアスリート化のテーマ、ボートスピード・スキルの科学的向上が難しい
 - 専門家を集めて専門家がチームを強化していくことが大事
- ・ 企業からの観点：競争の場がない
- ・ オリ特の活動をシフトする必要がある
 - ユース制式艇種を変更→420
 - 土俵を大きくしてコーチを集中させ、ユースから人材をピックアップできるように制式艇種として JSAF は大きく舵を取る。これはオリ特にとっていいチャンスであり、この環境をうまく利用しなくてはならない
- ・ オリ特は選手を育てる、強化する組織であるべき
 - 環境変化をとらえ、JSAF が主体となって、選手の育成に携わる
 - オリ特が専門家を集めて、企業チームなどをサポートする体制にする
 - オリ特はオープンに活動をしていきたい
 - それには多くの人の理解、協力が必要
 - オリ特だけが選手と接するのではなく、皆が接する組織づくりを目指す。

リオに向けて勝てるチームづくりを皆の意見を取り入れてしていきたい。

2) より良い成績を目指すために・・・(出席者意見交換)

① 企業チーム代表 坂本亘氏 (日吉染業所属、シエスタチーム)

* レーザークラス・ユースの選手強化についての意見

- ・ 海外からのコーチ招聘 (AUS・NZ) をしてはどうか
 - 年間3～4回、各1週間開催
 - 場所は和歌山 NTC
 - 1ヶ月、3ヶ月単位で強化
 - 海外コーチからノウハウなどを伝授してもらう
 - 練習方法、トレーニング方法取得を主体とする
 - 年間予算(推定): 1週間 AUS コーチ招聘: 年4回=200万円
- ・ 個人レベルでの招聘は難しいのでオリ特の人脈・組織力で取り組んでほしい

* 高体連の FJ→420 動きについて

- ・ レーザースタンダードクラスの採用もお願いしたい
- ・ インターハイ、インカレ→その後の活躍の場としてオリンピックというパスウェイを提案

② 日本 470 協会理事長 信時裕氏

* 470 協会の Mission: 普及活動

- 国内での選手層を厚くしていく
- 国内レースでの発掘→オリ特への橋渡し

* オリ特と目線をあわせて強化をしていきたい

- ・ 現状: トップ層の下選手層 - ミドル層が細い
 - 国内での競争の場がない
 - 次世代の女子がいない
 - 全日本 470→10年前と比べて低下している
 - 上位と下位の層のギャップが大きい
 - 全日本 470 への憧れ、意欲が薄れた→出たいと思う選手がいない
 - インカレで燃え尽きてしまう
 - 学校の体制で全日本に参加ができない。
 - 社会人選手が少なくなっている
 - 学生で卒業している
 - 現状はトップの NT と学生という構成
- ・ 社会人活動を増加する必要がある (準トップ層)
 - スタープラン (470 協会から選手への支援) を 3 年前より開始

→海外遠征の金銭的支援を行う→国内フリートレースに参加→そこで海外で
習得したトップのノウハウを日本国内に還元するシステム
→学生のトップへの資金支援
→U22 - JR ワールド遠征支援
3 年前にスタープランで支援した JR ワールド出場者→インカレで活躍

③ 日本 OP 協会理事 田中令江氏

*現状：44 クラブ 24 県、340 名程度の選手（選手登録以外込で 500 名程度）

- ・全日本選手権（140 名）
- ・海外遠征 1 次予選となっており、トップ 40 名が翌年 3 月の最終選考会へ進出
→世界選手権、ヨーロッパ、アジア、北欧選手権へ 20 名程派遣している
→海外派遣決定後は 5 月合宿→夏休みに海外レース派遣
→世界選手権にはコーチ招聘
→補助：世界選手権には若干あるが、ほかは自己負担

*OP→入門クラスとして重要な役割を持つ

・課題

→次の艇種が決まらない
→40 名ほどいる中学 3 年生の選手で全日本にでてくるのは 20 名程度
→高校ヨット部で活躍するのは 15 名程度
→大学は高校でできなかった子達が戻ってくるので人数は若干増加傾向
→インターハイ、インカレの上位は OP 経験者
→パスウェイが必要
→合宿 - 予選 - 全日本 - 選考会の道筋は明確で、そこまでのモチベーションを保つシステムはあるが、海外遠征に行くことが決定した時点でそこに行くまでにどうすればいいか、海外で上位に行くノウハウがない
→OP の子たちは決して必ずしもアスリートタイプではない
→小中学生向けのトレーニング方法などがほしい
→親は高校、大学までは目がいくか、オリンピックまではいかない
・JSAF に夢を持てるような仕組みを作ってほしい
→お願い：子供たちには J - Sailing が届かない
→色々な艇種情報がある J-Sailing は子供たち、その親たちの視野を広げることになると思われるので、こういった情報が OP の子達にも届くように検討していただきたい。

④ 選手代表 松永鉄也氏（スリーボンド所属；北京五輪出場 - キャンペーンはアテネから）

***選手からの観点**

- ・オリ特の方針などの話はあるが、選手は基本的にフィジカル、トレーニング、練習に集中したい

***選手が発言できる場を作ることが大事**

- ・選手会などの組織を立ち上げるのも良い
 - 今まではオリ特の決定事項を報告されるだけだった
 - 選手の立場からはそれに発言できない
 - 選手のためなので、選手の理解、ニーズに合わせるのが必要ではないか

***実践からの観点（470）**

- ・ボートスピード、パフォーマンスがトップと差がある（特にダウンウィンド）
 - 日本国内だけでは限界がある
 - 海外の選手とのトレーニングがてっとりばやいのではないか
 - NT は海外遠征中のレースの中でそれを学んだが、レース以外でそのトレーニングができれば、レースでボートスピードに集中できる

***強化合宿**

- ・北京五輪前は強化合宿があった、ロンドンのときはなかった
 - 練習・トレーニングは企業チームまかせになっていた
 - 合宿の場があれば、切磋琢磨できる
 - 日本にそのような場があれば、NT とその下の層のギャップが縮まる
 - 合宿は学生もいれて、色々な架け橋をつくる
 - 今回は特に、NT は恐怖を感じる NT 外の選手がいなかった
 - 学生の中にも恐怖を感じる選手が少ない。切磋琢磨しビビりながらといきたいが現状はそうではない。大学はインカレ主体。その中でも思いがある選手がいるはず。
 - それら選手との架け橋、相談役にオリ特がなってほしい

⑤ ナショナルトレーニングセンター 中村和哉氏（和歌山 SC）

***ナショナルトレーニングセンター（和歌山 NTC）は「つなぐ」という役割を担っている**

- ・地域には優秀なコーチ、選手がいる
 - 現状はそれらが集合できる場がレースである
 - 今後の NTC は
 - ・そのような各地域の優秀な人材がより集結できる場
 - ・種目間をつなげる場
 - ・NT の集合場所、切磋琢磨する場としていきたい

***NTC は優秀な人材が集結し、情報交換、切磋琢磨できる場を提供するのが使命**

⑥ 日本経済大学ヨット部監督 三船和馬氏

*選手を育成していく場：日本は学校というシステムの中が合理的

→選手とコーチは理解が必要

→ジュニアは基礎を叩き込むが、高校・大学は自分で考える力を育成すること
が必要

→コーチングが非常に大事；技術的にも選手と一緒にやる必要がある

→デジタル解析ができるようになった時代だからこそ、目標の数値化が
できる

→技術力につながる

→レースのクオリティを上げる必要がある

→現状は正確な技術が使用できるレースになっていない

→正確なボートスピード、バランスをコーチングする必要がある

→筋力・持久力のある選手に対しいかに技術的レベルアップをはかれるか

→現在は世界を追っかける立場、それでは金メダルはとれない

→先を行く知恵が必要

→日本のハードやソフトはいい、それを駆使していく必要がある

→470 級は日本人にあっていて

→まずはその 470 でメダルをとってから、ほかの種目に行くのがいいのでは

→メダルを取らないと、ワールドランキング 1 位でも、失敗と言われて
しまう

→選手の競争力を高めていく育成が必要

→今いる選手でメダルを取る

→普及につながる

⑦ 山田寛氏（オリンピックキャンペーン→キールボートで活動）

*JSAF 主体の強化に賛成

*いままでなかったのはなぜか？

・JSAF と企業チームの関係

→人間関係でうまく連携がとれていなかったのではないかな

→好き嫌いからの脱却が必要

・コーチ

→きちんと教えられるコーチが必要ではないかな

→個人的には技術を説明してもらったことがない。NT の選手には説明しづ
らいかもしれないが、感覚的に分かっているけど理論で分かっている選
手が多い。そこを修正できる人が必要

・ ロンドンでの新しい試み

- ロンドンに向けて、風調査やマスト開発の新しい試みがあった。今までとは違った試みだったので非常に良いと思う
- 実際それがどれだけ役に立ったかはわからないが、選手の考えを汲み取ったものであったのか？
- 選手と連携をして、実際に使えるようにしていく必要がある

⑧ 早稲田大学ヨット部監督 畠山知之氏

* インカレでも風の調査、海面調査やったことがある

- それをきちんと理解した選手が結果を出した
- オリ特としておこなった調査を開示するのがいいのではないかな？

* ダウンウィンドの課題という話が出たが、それにはどう取り組んだのか？

- レースに臨む前にハンドリングがありスピード、そしてタクティクスがある
- オリ特が組織として課題に取り組むべきではなかったかな？

* 国内選手層の格差が広がりすぎている

- NTの選手のレクチャーの場があってもいいのではないかな？
- 学生のレーススケジュールに合わせてNT選手の講習会があれば学生のモチベーションにつながるので、交流会のような機会を設けてほしい

⑨ 高体連ヨット専門部部長 岡島佳治氏

* 高校生に関しては競技より教育が主眼

- 自分で考えて実行し、得た知識を使えるように、と教育
- これらがベースで強くなっていく

* 高校でのスキルアップには顧問が必要

- 顧問・指導者の育成が必要
- 実際の活動は2年間
- 顧問の先生の知識が少ないのでこの強化も必要

* 高校生は乗る時間の確保と確実な基礎の習得がメイン

- これらが大学のベースになっていく

* 高体連の活動

- 資金不足なので活動はほとんどできない
- 各水域にJSAFよりコーチ派遣してコーチ・選手育成ができれば良いのでは
- コーチがいない水域もあるので、高体連の派遣費を出してもらいながら派遣してもらうのもひとつの方法ではないかな？

⑩ ノースセール ジャパン 菊池誠氏

*これまで7個の金メダルを獲得したオーストラリア（AUS）のセール&リグチューニングを担当

- ・コーチのビクター・コバレンコはなぜすごいのか？

- モチベーターである；選手のモチベーションをあげるのはうまい

- 各目標・テーマを決めて合宿をしていく

- 練習時間は基本3時間（走行は2時間）

- （例）

- ・10ノット以下のUPウィンドのスピードUP - 2時間という練習メニュー。

- 10ノット以上になると練習をやめ、10Knot以下で行うテーマの徹底。

- 2ボートテストティング・システムの導入

- パフォーマンスを数値化し、GPSを用いて評価→個々のテーマを選別

*日本チームはチューニングに頼りすぎている

- ・AUSはチューニングも行うが、幅が広い

- 体を使ってセーリングをする

- キネティクスとセーリングスキルが伴っている。

*Sail Fast, Sail Smart

- ・Sail Fast - フィジカルの要素が強い

- いつものセッティングでどれくらいセーリングができる体力があるか

- 日本チームは情報能力が低い

- フィジカルができていて、ハンドリング・コントロールができな2ボートシステムは活かされない

- アビームチームレベル程度では活かされるが、パートナーが遅ければあまり意味がなくなってしまう

- チューニングに頼りすぎてはいけない

- 例えば、メイントリムが重要なのにリグチューンに頼る。

- ミラクルはない。歴史のあるクラスではミラクルは起こらない。

- コーチ、選手は地道な練習が必要。

*ルールへの精通

- 判例集全部覚えていなくてはならない

- ジュリーを呼んで勉強をもっとする必要がある

- 普段の海外遠征でもプロテスト慣れしていかななくてはならない

- 関一人選手のアテネでのメダルは初日にウィルモットを倒したから

- プロテスト能力も選考基準にいれるのも良いのではないか

*選手とコーチの会話、コミュニケーションが非常に大事。

- 日本独自の強化方法を構築すべき

- AUSは選手はすごいが、それ以外はたいしたことはない

3) 選手強化の現状（中村健次ナショナルコーチ）

(1) 基本的取り組み

- * ロンドンではメダル獲得、複数で入賞を目標とした
- * 世界選手権の結果をベースにオリ特独自のランキングシステムによって上位チームへの支援（補助金）を行った。どのクラスも2チームまでは手厚く強化。

(2) 一般 NT 選手

- * 国内合宿
 - ・ 国内合宿はロンドンキャンペーンではあまり行っていない
- * 海外遠征
 - ・ 海外遠征にオリ特コーチが帯同して指導できるようにしていた
 - ・ ランキングによって補助の差別化を行った
 - ・ ロンドンに向けて、マルチサポートを活用し、風・潮流等ウェーマスの特徴を掴む取り組みを行った。また、本番まで毎年現地大会に出場し、トップの選手は合宿を含む約200日間滞在。ウェーマスの海上がホームになるように取り組んだ。
→成績によって判断されると難しいが、新しい取り組みとして選手らは理解していたと思う。
- * マルチサポート
 - ・ 470 クラス限定で国からの支援を受けた。
 - ・ 2009 年からセーリング 470 男子がマルチの対象になった。風調査、マスト開発を行った。
 - ・ マルチスタッフと選手、コーチとのコミュニケーションに関しては、実質1年しかなく、もう少し時間が欲しかった；特にマスト開発にはもう少し時間が必要だった。

(3) ジュニア・ユース選手（榮樂洋光ジュニア・ユース育成強化委員会副委員長）

- * ジュニア・ユースの Mission :
 - ・ ISAF ユースで勝利できる選手の育成
 - ・ ISAF ユース参加選手から将来のオリンピック選手へと育成 - (例) 土居愛実選手
 - ・ ジュニア・ユースの活動から社会に貢献できる人材育成
- * 制式艇種
 - ・ 420、ラジアル制式艇導入（2015 年より）
→活動基盤が大きくなる。

- 2015 までに普及と強化の2本柱で重点的に活動し、競技人口拡大に努める
- ・各水域の指導者の協力と連携が必要
- 土俵が大きくなれば強化がしやすくなる。
- そのためにオリ特、ジュニア・ユースが現場に赴き、活動の理解を深める。

＊国内合宿

- ・合宿の費用がかかりすぎている
- ・指導教材
- 指導現場の選手、受講対象者のニーズにあった資料作りが必要。

＊海外遠征

- ・ISAF ワールドで上位が獲得できる強化活動を行う。
- ・日本でできない経験を、海外遠征を通じて経験させる。

4) 現状の選手強化資金（山田敏雄オリンピック特別委員会マネジメント委員長）

《収入》

（1）補助金

- ・JOC 補助金
- ・スポーツ振興基金補助金
- ・〃 重点競技補助金
- ・スポーツ振興くじ補助金（toto）
- ・その他補助金

（2）事業参加料

- ・選手負担金
- ・役員負担金

（3）J-Sailing 広告、免税募金協賛

《支出》

（1）補助金対応事業支出

- ・選手補助金
- ・帯同役員補助金

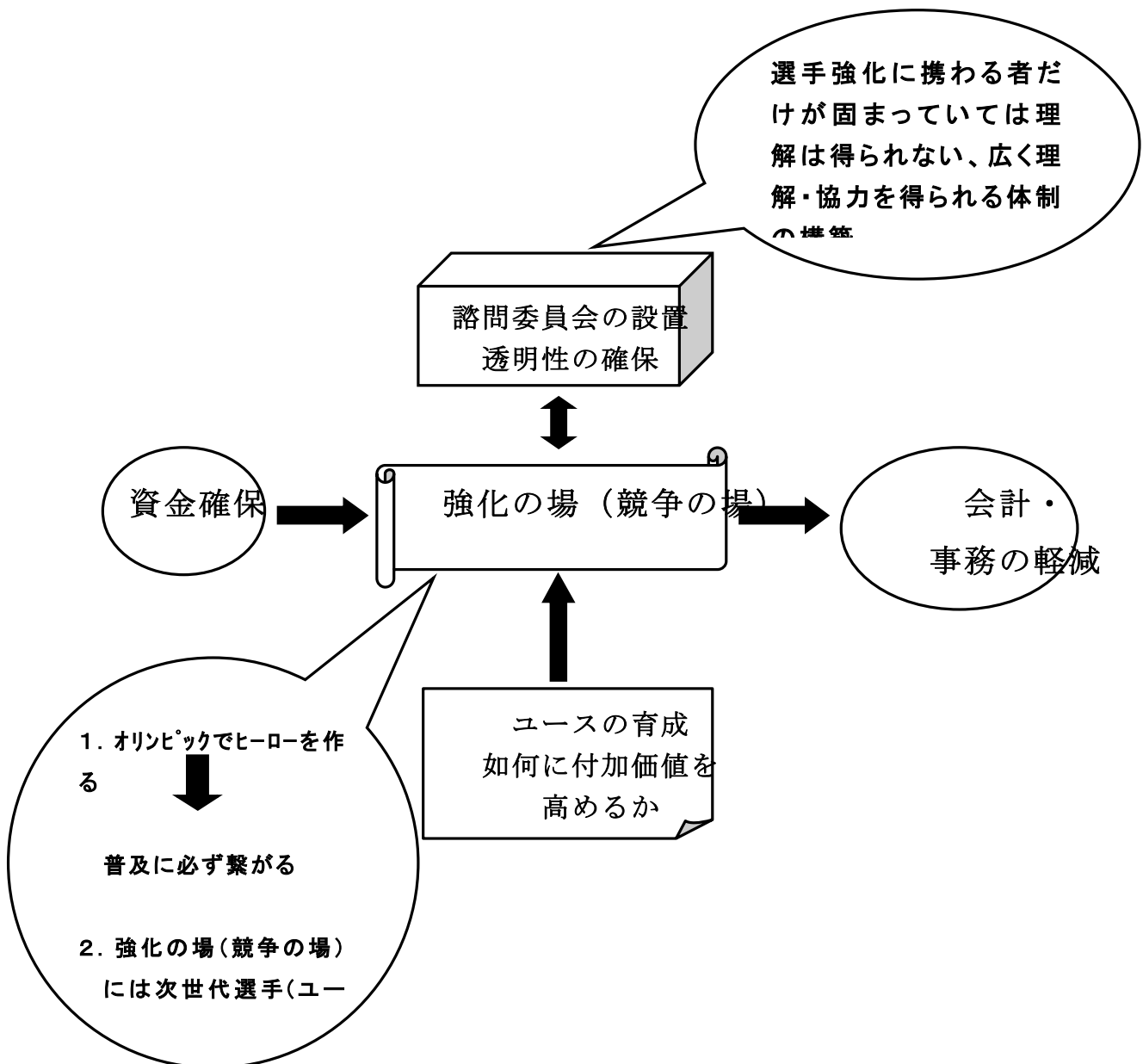
(2) 自主事業支出

(3) 負担金支出

5) 今後の強化

(1)我々はこうありたいと考える (西岡一正委員長)

《選手強化の基本》



*強化の場が必要

→どのような場にするかがキー

→場を作っても得るものがなければならない。得るものを与えるのがオリ特的使命。

データもノウハウもあるはず。スタッフも勉強が必要。

→場を作ることによりユースも巻き込む。

470 の選手と同じ海域を走るだけでもよい。背中を見せるだけでもよい。

→コーチの連携の場

コーチとの連携を図る。情報の共有化。コーチのレベルの引き上げ。

＊必要項目

① 資金の確保

- ・ 5500 万の事業規模を JSAF が負担しなければならない。
- ・ スポンサー価値がある場にする必要がある
 - 持続的にやらなくてはならない
 - これは JSAF の組織としての理解・バックアップが必要

② 透明性の確保

③ 事務負担の軽減

(2) 今後の強化のあり方（中村健次ナショナルコーチ、飯島洋一アシスタントナショナルコーチ）

＊日々の練習 ・強化合宿 ・コーチ派遣の水域合宿 ・海外遠征

→ 日々の練習に関して、具体的なプランは？

- 各選手の同行チェックが必要なのではないか
- メールでの情報交換など

→海外招聘は誰？

- 470 は金メダリスト、レーザーは候補ピックアップされている

＊リオ・オリンピック種目

＊代表選手選考の考え方（案）

→最終選考は海外か？

- まだ決定ではない；ポイント制にする

→国内最終選考を国内レースで決めるのはどうか？レース自体の商品化。

→12 ノット以下だけの風をカウントするのは危険なのは？

G1 レースで活躍できる選手がオリンピックで勝つ選手。

最終選考のレースは慎重に検討すべき。

→強い艇種は本番 10 ヶ月まえには決定していきたい

→年内には選考方法を決定したい

→選手の候補は誰？

- 470 女子ー現状いない

- 470 男子チームとしてはいないが松永鉄也と吉田雄悟で全日本
- 12 月 26 日ユース合宿のあと 470 と FX の試乗会を行う
→女子選手ピックアップ

・その他

- ・国内競技会の整理 ⇒ JSAF ナショナルの提案(中村健次ナショナルコーチ、重由美子)
- ・国体レースフォーマットの提案 (鈴木國央)
- ・選手活動環境整備のための受け入れ先確保

【意見】

- JSAF 主体でのコーチ・指導者育成を行っていく
- 制式艇種－シングルハンド
 - ・ラジアルーインターハイ検討
- 水域でのシステム化・ヨットクラブ化
 - 県連が購入して高校が使用できるようなシステムの構築
- 学連の制式艇種
 - 2013 年レーザーを制式艇種にする提案をする
 - 全日本学生個人選手権の制式艇種として認めてもらうように動く
シングルハンド学生選手権の予選は各水域でやる
- ワールド招致
 - ・2014 年：レーザー4.7 ワールド
 - ・2016 年：420 ワールド
- 選手強化
 - 合宿にジュリーを呼んで欲しい
 - On the water での指導
→2013 年度での合宿で取り入れていきたい

(3) 科学的アプローチ (ノースセール ジャパン 鹿取正信氏)

- *ボートスピードをあげるために
- *2 ボートテスト・システム
 - ディンギーではオンウォーターフィードバックができる
 - 選手とコーチとのディスカッションが必要
→それがないとこれは意味がない
 - True Wind Direction の理解、Error Factor の理解が必要
→ディスカッションが重要

→これは一つのツールでしかない、理解せず間違った使い方をすると危険

*Sail Smart：一つでも順位をあげるために

→オプティマムコース；レースレビュー

(4) 海外の動向（ノースセール ジャパン 高桑敬氏）

*オーストラリアは5つのメダルを獲得、英国は4つのメダルを獲得

→それぞれやり方は異なる

*オランダ女子も強豪の一つ

- ・アテネ五輪終了後、新ヘッドコーチ

→8年間で世界選手権5回優勝、北京銀メダル、ロンドン銅メダル

- ・オランダコーチ：ジャポー（ウィンド出身；470・五輪経験なし）

→スポーツ心理学・コーチの勉強をしてきた人

→自分の得意なこと不得意なところは認識している

→自分ができるところはやるが、そのほかはエキスパートを選んで完全に任せる

→コミュニケーション能力が高い

→選手をメンタル的に誘導していく能力が高い

→心理テストをし、性格によつてのコミュニケーション方法やトレーニング方法を合わせる

→メンタルトレーニング：ビジュアリゼーション

→トップ選手は頭の中で常にヨットレースを描いている

→その他準備

→天候チェックはWindguru（ウインドグル）などのサイトを常時チェック

翌日だけではなく短中期のトレーニングのプランニングも天候チェックしながら選手が行う

*選手はコーチを信頼。

→選手2名とコーチ3人で一チーム。

→コミュニケーション能力が双方で長けている

→ブリーフィングに時間をかける

→その日の課題はその日に片付ける

→心と体のケアも重点を置いている

→能力の強化（テクニック、道具、体力）→ボートスピード強化→レース。

→体重の管理も選手が徹底している

→レーステクニック、ルール、ストラテジーの強化

*日本は日本のアプローチがあるのでは？

→体型、地理など不利な点があるが、オセアニアに近いなどいろいろある。

6. 強化資金の確保（山田敏雄マネジメント委員長）

- （１）補助金の予測
- （２）広告、免税協賛の予測
- （３）新たな資金獲得の方策

7. 透明性の確保と協力の在り方（西岡一正委員長）

- ・ 定期的な意見交換会を開催し、透明性を確保しつつ、各方面での協力を得たい

以上。